

戦はざるを得ず！

敬愛なる市民諸氏よ

私達が此度決行するに至つた争議に干し、絶大な御同情を寄せられたことを感謝します。私達の要求が如何に妥當なものであるかは、天野社長自身が「要求の項目は成程妥當である……」と言つたことに依つても、明白であります。

然らば、何故社長は此の妥當な嘆願を聞き入れないか。それは即ち、私達が今日まで、只溫和しく、撲られても、蹴られても、御無理御尤で働いてゐたので、社長は私達を全るで昔の奴隷の如く考へ、爲に、「奴隷が社長に向つて要求するなんて怪しからぬ」と思つてゐるのです。

成程、最近まで、全く奴隷の様に踏付けられて來ました。然し、假令私達は、奴隷でも何時かは目覺める時が來ます。今おそまき乍ら、目覺めました。それを會社では「生意氣だ」と言ふのです。のみならず、

私達労働者をおごかすに

ことを替へて「軍隊でも警察でも俺の意に儘になると」か「國家産業の爲に會社が潰れる迄戦ふとか」或は「職工の背後にある日本労働組合評議會が不可ぬ」と言つて窮迫した私達労働者の生活を全然考慮せず、只ひとへに、弱いもの同志團結してゐること『生意氣』と言ひ「怪しからぬ」と言ふのです。

公平なる市民諸氏よ！

之れ果して、大正の聖代に生きる人間の言葉でせうか。「軍隊や警察を意の儘に使つて見せる」等と聞いては私達は斷固として黙過する譯には行きません。私達のみならず、市民諸氏におかれても、斯の如き國家を無視し、軍隊や警察を自己の使用人の如き態度を執る

社長天野の暴言を「當然なり」と

黙過される可きでないを確信します。更に「國家産業の爲」と社長が言ふのなら何故、極めて妥當な嘆願をも斥けて、一千三百有餘の労働者が、どうしても罷業せざるを得ない様な窮地に逐入れて、平然としてゐるのでせう。

最後に、諸氏に一言したいことは會社側が口喧しく言ひ振らしてゐる所の『背後にある日本労働組合評議會が煽動して争議を起さしめた』と言ふことです。

成程私達の多くは無學無智です。未だ労働問題も、共産黨も、何であるか詳しく知りません。只、望む所は、工場の中に、便所を設け、食堂を樹て、作業に使ふボロなどを消毒し、賃銀なども、もう少しあげて欲しいと、言ふこと丈であります。

その私達の望みがうまく徹る様に、弱いもの同志團結してゐるのです。今若し私達が團結することを止めたなら、會社は直ちに得たり賢しとばかり、一人／＼呼び付けておどかし、今迄の如く

撲られ蹴られ尙一言の文句も

言へぬ状態に墜し入れることは明らかです。

故に私達は、私達の生活を維持して行く必要上先づ團結し、穩かに、最も妥當な嘆願をしたのです。斷じて、煽動されたのでもなく、輕率盲動してゐるのではありません。

ストライキを執行することは、私達としては餘程の覺悟と決心がなければ、出來得ないことで、少數の煽動や、輕々しい考へから起し得る程而く容易なものではありません。全く生命がけてす。

願はくば市民諸氏よ！

私達の嘆願と會社側の態度を、冷靜に批判せられ、生死の境に起つて、頑迷なる會社と戦ひつゝある、争議團に、今後さらに一層の御同情と御鞭達あらんことを切望する次第であります。

大正十五年五月一日

日本樂器株式會社争議團